

「スポーツ・アスリートを対象にしたメディア・トレーニングの必要性」に関する研究報告

片上 千恵¹⁾

The Need for Media Training among Sport Athletes

Chie KATAKAMI

Key words : Media Training, Athlete, Public Relations, Sports Media

キーワード：メディア・トレーニング アスリート パブリックリレーションズ
スポーツメディア

1. はじめに

スポーツの人気が高まるにつれ、メディアによってアスリートが取り上げられる機会が増えている。アスリートの競技レベルが上がるとともに取材される量も増え、その対応によってはプレイの妨げになる結果を招くことも少なくない。アスリートがメディアを通して社会と関係を構築するためには適切なメディア対応が求められる。近年ではスポーツやアスリートの社会的イメージの向上、ファン、スポンサー、自治体などの様々な利害関係者から社会的支援の獲得を意図し、メディアへの適切な対応に資するメディア・トレーニングが注目されている¹⁾。

2. 研究の範囲：標準化と個別化

著者はメディア・トレーニングには大きく分けて標準化と個別化の2つのタイプがあると考え、標準化されたメディア・トレーニングとは、スポーツ・アスリートとしてチームや組織が想定する必要最低限の考え方やスキルを習得することを目指しており、それを到達点とした場合に不足している部分を穴埋め的に補うことを目的としている。主に、新人アスリートや新規に組織化を図るチームな

どへの適用が有効なメディア・トレーニングである。

一方で、個別化されたメディア・トレーニングとは、すでに社会的に人気・実力が認知され、社会的影響力の大きいアスリートに対応するものであり、個人の能力や個性、または個人やチームの目的に合わせて個別のスキルを習得することを目的とする。アスリートのスキャンダルに対する危機管理やアスリート個人のブランディングの一環として実施される²⁾。

わが国のスポーツ界における現状を踏まえ、また、アスリートのメディア・トレーニングというテーマは研究としても初期段階に位置することから、まずはスポーツ界全体のレベル向上を志向して、メディア対応の意識および能力の底上げを図るための汎用性の高いプログラムが必要だろう。

3. 研究の手順

本研究目的を達成するために2つの研究を実施する。研究1では、本研究の最初の目的である「メディア・トレーニングの必要性」を検討するため、中央競技団体がメディア・トレーニングに対して持つニーズをアンケート調査とヒアリング調査によって明らかにす

1) 競技スポーツ学科

る。次に研究2では、メディア・トレーニングの必要性をメディアの視点からも検討するために、スポーツ放送従事者を対象としてヒアリング調査を実施する。メディア側の意向に対してアスリートやスポーツ団体がどのように対応すべきかという問題の中で、メディア・トレーニングが持つ必要性を明らかにすることが目的である。これらの結果を基に、実践的示唆として「トレーニング・プログラムの開発の方向性」を提案したい。

4. 結果と考察

二つの調査の結果から、標準化されたプログラムに必要とされる内容としては、取材に適切に意見を伝えられる(1)基本的なコミュニケーション・スキル(研究1)に加え、(2)メディアを理解すること(研究2)、(3)メディアに対する危機意識を持つこと(研究2)などである。仮に、アスリートがメディア・トレーニングを通して、コミュニケーション・スキルの基本である論理的思考や的確に表現する力³⁾を身につけることで、メディアに対して自分の競技や自分自身のことを誤解なく伝えることが可能になるだろう。また、アスリートがメディアを理解すること(役割や事情を知ること)で、ヒアリング調査の結果で得られたように、「負けたアスリートに対するメディアの非情さ」に関してアスリートが抱くメディアへの不信感も随分緩和されるだろう。更には、メディアに対する危機意

表1 メディア・トレーニングの必要性および実施状況 (n=35)

項目	選択肢	n	%
メディア・トレーニングの必要性			
1.	選手に必要	4	11.4%
2.	指導者に必要	1	2.9%
3.	選手・指導者に必要	22	62.9%
4.	必要なし	6	17.1%
5.	無効回答	2	5.7%
メディア・トレーニングの実施状況			
1.	行っている	4	11.4%
2.	過去に行った	3	8.6%
3.	行っていない	28	80.0%

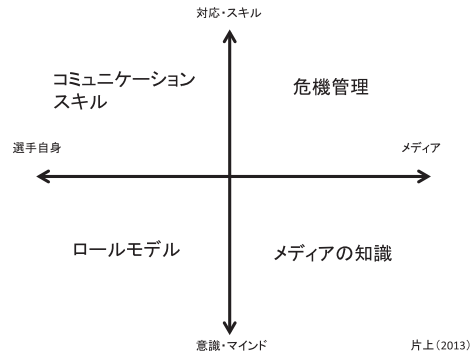


図1 メディア・トレーニング・プログラムの概念

識を持つことで、トップ・アスリートとしての自覚が芽生え、競技以外の場面でもきちんとした振る舞いを心がけるきっかけになるものと考えられる。

中央競技団体へのアンケート結果では、わが国のスポーツ・アスリートのほとんどがメディア・トレーニングを受けたことがない現状を明らかにした。したがって、初期段階のトレーニング・プログラムはより多くのアスリートに対応できる、より汎用性の高い内容であることが条件となるだろう。メディア対応能力の個人差はこれまでの生活環境によるところもあるが、取材された経験の豊富さとも比例する。取材経験によるメディア対応の上達機会が少ないマイナー競技アスリートや、社会経験の乏しい新人アスリートには標準化プログラムを経て、レベルを上げることが求められる。調査では、中央競技団体には、アスリートの個性を引き伸ばし、スター選手を輩出することによって競技人気を高めたいと希望しているところも少なくなかった。その場合は、競技団体やチームの戦略的なプランに基づいて、特定のアスリートに対応させた個別化プログラムを作成していくことが必要である。しかし、そのようなアスリートには、既に標準化レベルの意識や能力が備わっていることが前提条件であり、ロール・モデル足り得るキャラクターを目指して個別化したメディア・トレーニングを施した

めには、まずメディアに関する基礎的な対応能力を備えることが優先であると考える。

参考文献

- 1) ひと：スポーツ界で取材対応を指導するメディアトレーナー，朝日新聞（東京），2008年1月21日朝刊2面。
- 2) IMGジャパン・公式ホームページ（<https://www.imgjapan.com/>．2011年7月11日）。
- 3) 小室 功（2003）JFAエリートプログラム 第3 回合宿 コミュニケーション&IT. Soccer Clinic, 10 (11) :30-34